

氏 名	中 村 香 子 なか むら きょう こ
学位(専攻分野)	博 士 (地域研究)
学 位 記 番 号	地 博 第 57 号
学位授与の日付	平 成 20 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	ア ジ ア ・ ア フ リ カ 地 域 研 究 研 究 科 ア フ リ カ 地 域 研 究 専 攻
学 位 論 文 題 目	ケニア・サンプル社会における年齢体系の変容動態に関する研究 ——青年期にみられる集団性とその個人化に注目して——

論文調査委員	(主 査) 教 授 太 田 至 教 授 市 川 光 雄 准教授 重 田 眞 義 教 授 佐 藤 俊 (筑波大学)
--------	--

論 文 内 容 の 要 旨

東アフリカにおいて牧畜を主要な生業とする諸社会では、年齢体系が重要な社会的機能をはたしていることが多い。これは、いくつかの年齢範疇に人びとを分類して、それぞれに特有の社会的な役割や行動規範を付与するものである。牧畜社会は乾燥地域に分布しており、従来は「近代化」や開発から排除されることが多かったが、現在、こうした社会もまた、市場経済の浸透や学校教育・近代医療の普及、国家の司法・行政による統制の強化などによって、急速に変貌している。本論文は、ケニア共和国の中北部に住むサンプルの人びとを対象として、年齢体系の変容に焦点をあてながら、おおきく変容しつつあるサンプル社会の動態を記述・分析することを目的としている。

サンプルのすべての男性は、誕生から割礼までは「少年」、割礼後に結婚するまでは「モラン（戦士）」、そして結婚後は「長老」という三つの年齢階梯にわけられるが、本研究は、未婚の青年であるモランを主たる調査対象としている。

本論文の第1章では、研究の目的を論ずるとともに、先行研究を整理して問題点を明らかにし、また調査地と調査方法の概要を説明している。第2章では、サンプルの年齢体系の全体を記述しているが、とくに男性の社会的な地位をドラスティックに変化させる集団的な儀礼と、それぞれの段階で男性に課せられる行動規制が詳述されている。そして、ひとつの年齢組に属する男性が集団的に地位を変化させることによって、男性の「集団性」が高められており、そのピークはモラン期に創出されていることを明らかにしている。

第3章では、モランと未婚の娘たちの恋愛について記述・分析している。彼らはビーズの授受を介して、社会的に認められた、いわば擬似的な婚姻ともいえる独特の関係を結ぶ。そして、同一クランに属するモランは「クラブ」という単位によって、恋愛対象となる未婚の娘たちを専有しようとする。本章では、こうした未婚の若者の性と恋愛を既婚者（「長老」）のそれと対比させながら分析し、性にまつわる規範や行為のパターンは、年齢階梯間の差異を際立たせる装置となっていることを論じている。

第4章では、サンプル女性の人生の段階がとりあげられている。身体装飾を分析した結果、女性は「未婚期」「結婚から第一子の割礼まで」そして「第一子の割礼後」という三つの段階に応じて身体装飾を大きく変化させており、それは、女性たちの恋愛や性のありかたとつよく関連していることが明らかにされている。

第5章では、従来は集団的におこなわれていた男性の割礼と結婚が個人的に実施されるようになったことが記述されている。そして、こうした「個人化」の傾向を地域ごとに分析することによって、サンプル社会の内部に顕著な地域差が発生していることを明らかにしている。そして第6章では、女性が結婚に先だって割礼をすませ、「スルメレイ」とよばれる範疇（未婚であるが出産可能な女性）になることを選択するという新しい状況が記述されており、これにも顕著な地域差があることが論じられている。

第7章では、モランの観光地での出稼ぎ経験を取りあげ、ダンスや装身具を観光客に「売る」という行為をとおして、彼

らが観光地と故郷の差異をどのように意識化しているのかが分析されている。

終章である第8章では、「集団性」と「個人化」という二つの矛盾する指向性を分析の枠組みとしながら、サンプルの年齢体系の変容のダイナミズムが分析されている。そして、この二つの指向性をめぐるさまざまな実践によって、人びとは地域間、世代間、個人間などにさまざまな差異を産出しており、また、そうした差異を意識化しつつ人びとが能動的な選択をおこなうことによって、年齢体系がダイナミックに変化していると結論している。

論文審査の結果の要旨

年齢体系とは、人びとをいくつかの年齢範疇に分類して、それぞれに特定の社会的な役割や行動規範を付与し、経済的、政治的あるいは宗教的な実践に指針をあたえるシステムである。こうしたシステムを有する社会は世界のさまざまな地域に見られるが、とくに東アフリカには、年齢体系が重要な機能をはたしている社会が多いことが知られており、それに関する人類学的な研究が蓄積されてきた。しかしながら現在、政治的・経済的なグローバル化の進行にともなって、年齢体系も大きく変容する過程にある。新しい状況のもとで、従来は重要な社会的機能を担ってきたシステムがどのように変容しているのかを明らかにすることは、この地域の諸社会の実態を理解し将来を見すえるうえで、きわめて重要な課題である。本論文は、ケニア共和国の中北部に住むサンプルの人びとを対象として、年齢体系の変容のダイナミズムの記述と分析にとり組んだ意欲的な研究である。サンプル社会のすべての男性は、割礼を受ける前の「少年」、割礼後から結婚するまでの「モラン(戦士)」,そして結婚後の「長老」という三つの年齢階梯にわかれているが、本論文は、とくに未婚期の青年であるモランに注目している。

本論文は、以下の3点において重要な学問的貢献をなしている。第一は、本論文が年齢体系の動態を記述・分析するための枠組みとして「集団性」と「個人化」という二つの矛盾する指向性に注目して、人びとがさまざまな差異を構築する実践を整理して位置づけたところにある。集団性とは、人びとが同じ行為を同時期におこなう指向性であり、ひとつの年齢組のメンバー間のつよい結束をもたらし、それは特にモラン期に顕著である。しかし、男性の割礼や結婚は、従来は集団的な儀礼をとまっていっせにおこなわれていたが、近年では、個々人が単独でおこなう事例が増加し、むしろそれが多数派となっている。本論文は、こうした「個人化」の現象がサンプル社会に一樣に出現しているのではなく、「進歩的」な高地では高頻度でみられるが、逆に「伝統的」な低地の人びとはこうした傾向を批判し、つよく「集団的」であろうとする実践を意識的に選択していることを明らかにしている。

本論文の第二の貢献は、モランと女性に注目して年齢体系の動態を分析したところにある。従来の年齢体系に関する研究では、さまざまな権力が集中している既婚男性(「長老」)に焦点があてられてきた。これに対して本論文は、女性が人生の段階に応じて性や恋愛のありかたをドラスティックに変化させることが、同時に、男性の年齢階梯間の差異を強調する装置となっていることを論証しているが、これは、従来の研究の欠落を埋める重要な貢献である。また、現在のモランは学校教育をうけたり、都市部に出稼ぎにいった経験をもつものが多く、サンプル社会において変容の最前線にいるといっていよい。本論文は、こうした若者が外部世界との接触のなかで、自分たちの「伝統」を意識化しつつ、新たな実践を産出する機序を解明している点で高く評価できる。

本論文の第三の貢献は、サンプルの年齢体系に関する克明な民族誌的記述を実現したところにある。とくに、未婚の青年がビーズの授受を介して形成する独特の恋愛関係が、青年期に特有のものであって、既婚者の性とは構造的に対立するものであることを精緻に記述したこと、また、従来の研究ではひとつの年齢組に属するメンバーの「平等性」が強調されてきたが、実際にはそのなかで同一クランのメンバーを中心に形成される「クラブ」こそが重要な単位であり、また、割礼時期の違いによって同一年齢組のメンバー間にも厳然たる長幼の差異があることを明らかにした功績は大きい。

よって、本論文は博士(地域研究)の学位論文として価値あるものと認める。また、平成20年1月24日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。